

スポーツと下位文化についての一考察

—— X・サーフ・ショップにみられる「男性文化」——

水 野 英 莉

はじめに

ジェンダーに関わる新しい研究の焦点として、男性と男らしさについての社会学的研究が、1980年代半ば以降、アメリカやイギリス、そして日本でも登場し始めている。この研究に関する学会や多数の出版物から、この研究分野が成長過程にあることがわかる。最近では特に、スポーツと男らしさ、より厳密には、スポーツにおける「男性の経験」を分析の対象とするスポーツ社会学研究者が増えつつある⁽¹⁾。スポーツの中で、またスポーツを媒介として、女性が抑圧され従属させられるということの詳細な説明は、男性や男らしさの分析と密接に関係している。女性について最も深く分析している著述は、まさしく、男性の特権と権力の分析を内包したものである。このような研究は、男性の生活を批評するだけでなく、変革し、女性との関係やお互い同士の関係を新たに築き上げていくために役立つものである。日本でも「男性学」と呼ばれる分野に、スポーツと男らしさについての研究が見られるようになり、男性主導社会である近代産業社会の影響を色濃く反映したスポーツの歴史が論じられている⁽²⁾。しかし、スポーツの経験や現場を具体的に取り上げて検討することは、まだほとんどないのが現状である。

したがって、本論ではスポーツをする者自身の経験に焦点を当て、スポーツと男らしさの関わりを考察する。ここでのねらいは、ジェンダー不平等な関係性と規範が創出される過程を追っていくことである。平等の障害になっているものは、単にそれを同定するだけでは取り除かれない。しかも、「スポーツ＝男性中心的」を表示しつつ、その実態を探らないことは、スポーツに女性は向いていないという従来からある偏見を補完しかねない。

⁽¹⁾ この領域におけるパイオニアは二人のアメリカ人研究者であるマイケル・メスナーとドナルド・サボーである。最新の共著は『スポーツにおける性、暴力、権力 —— 男らしさの再考』(Messner & Sabo, 1994)。

⁽²⁾ 伊藤 (1998、1999)、西山 (1998) 参照。

本論では、とりわけサーフィンをする若者たちの集団への参与観察にもとづき、「男性優位の原理」の内実、「男らしさ」の表出形態、権力関係が醸成される具体的な過程を明らかにしていきたい。その際、従来のように、スポーツの持つ歴史的な背景から「男らしさ」との結びつきを考察したり、スポーツそれ自体に含まれる近代的な競技性や合理性を論じるのではなく、スポーツの周辺で育つ下位文化に内在する「男性原理」や「男らしさ」の表現に注目し、スポーツをする者が日常的な実践によって構築していくような権力関係を明らかにしたい。まずはじめに、近代スポーツとジェンダーに関する研究を概観し、スポーツの下位文化に含まれる「男らしさ」の表出の枠組みを示す。次にその枠組みに沿ってサーファーの世界で表現される「男らしさ」を検討し、下位文化の再生産の様子を見る。そしてそれを受けて、サーフィンの世界に起きつつある変化のきざしを紹介し、変革の可能性や萌芽などが見られることを示していきたい。

1 スポーツと下位文化

1-1 近代、「男らしさ」、スポーツ

今日、ジェンダー研究が学際的・国際的な広がりをみせるなかで、スポーツ社会学研究においても、このジェンダーというテーマはきわめて重要な課題になろうとしている。女性の観点からの歴史の見直しが、これまで「自明／自然」とされてきた事柄の背後にひそむ支配関係や男性支配によって隠蔽されてきたさまざまな事柄を、新しい文脈から位置づけなおすことを可能としたのは周知の事実である。女性の観点からの見直しのなかで、今度は1980年代半ば以降、男性の視点から歴史や社会の見直しをしようという動きが出て来た。女性の視点からの歴史の見直しが、これまでの人間の歴史は、人間＝男性という構図のなかで描かれ分析されてきたことを明らかにしたように、人間＝男性として描かれてきた歴史を、「男性」というジェンダーに縛られてきた人々に焦点を合わせなおすことで、新しい知見を得ようとするのである。ここでは最近急増しつつある「男らしさ」の視点からの研究業績から、近代スポーツとの関連に焦点を当てている研究をみてみよう。

社会学者の伊藤公男によると、近代スポーツは「男らしさ」を証明する絶好の場となっているという。なぜならば、近代という時代は男性たちにたえず自己の「男らしさ」の証明を要求する時代であったため、近代スポーツは男性主導社会である近代産業社会の影響が色濃く反映されていたからである。そもそも近代社会では、男女の相互補完的な関係が内に構造化されたコスモロジーが崩壊し、男性＝産業労働＝公的労働、女性＝家事労働＝

私的労働という分業が生じ、男性支配が強化されていった。そして近代社会は個人主義社会でもあり、ジェンダーは個人を支える不可欠の要素となる。これまで以上に個々人はジェンダーを意識し、男性たちは自分の「男らしさ」を他者を媒介しつつ常に自他へ呈示していかなければならなくなった（伊藤、1998）。

このとき男性たちの社会的自己確認のために利用されたのが近代スポーツで、同時に男性性イデオロギーを男たちに植え付ける役割を果たした。近代産業社会を導いた男性原理は、専門分化・効率化・生産性重視といった傾向を強くもっており、近代スポーツの特徴である専門化・組織化・計量化・合理化の傾向や、それに結びつく競争原理・達成原理・記録主義の強調と、重なりあう点が多いことがわかる。

ここでいう「男らしさ」、男性性を一言で言うならば、ロバート・コンネルの「ヘゲモニックな男性性」（Connell, 1995）という言葉で言い表すことができる。すなわち、男性たちは自らより「下位」にある他者に対して常に支配的であることが要請されるということだ。下位はもうひとつのジェンダーである女性であり、また従属的な位置にある男性である。コンネルの議論を受けて、男性性と犯罪の関係について分析したメッサーシュミットは次のように言う。「男たちは、会話や服装や肉体的外見や活動や他者との関係を通じて、ヘゲモニックな男性性を表現しようと努めるが、これらの男性性の記号は、個々の行為の特殊な環境や、関係性に反応する社会的行為に基盤をおいている。それは個々の特殊な文脈において再調整された社会的構築物なのである」（Messerschmidt, 1993）。つまり、男性性は個々の条件や状況に対する反応として現れる。「男らしさ」は何か実体がある固定的なものというよりも、状況によって多様に現れるものなのだ。男たちは状況に応じて常にヘゲモニックな男性性を表現しなければならないので、個々の具体的な行為を通じてその場その場で「男らしさ」を再生産することを強いられる。それゆえ男たちは「男らしさ」にこだわり、縛られ、そこから脱することができなくなっていくのである。

1-2 近代スポーツにおける「男らしさ」の表出

このように近代および近代スポーツと男性性とは分かちがたく結びついており、スポーツの場で「男らしさ」はさまざまな形をとって表出してくる。スポーツと「男らしさ」の関係について現在展開されている知見のうち、スポーツの周辺で育つ下位文化と「男らしさ」の結びつきを扱った研究を概観しよう。

まずよく見られるのが、女性が排除されたスポーツの世界を批判的に分析する研究である。例えばシアードとダニングは、イギリスのラグビークラブに所属する選手たちが、試

合の後バーやバスの中で、男の「ストリップショー」を行なって、卑猥な歌を歌ったり、酒浸りになったり、器物を損壊したりするタブー破りは、高度に儀式化した形態を取ることが多く、ラグビーの周辺で発達した下位文化に不可決な部分を形成していると述べている（シアード&ダニング、1988）。選手たちにとっては、ゲームそれ自体に加えて、このタブー破りの儀式が楽しみや満足を提供する場となっているのである。これらの行為はラグビー選手が主に所属する上流・中流階級の規範を犯すものであり、またスポーツの求める「健全な身体と健全な精神」という規範に反するものであるが、イギリスにおいてはパブリックスクールとラグビーの歴史的関係によって、その行動は大目に見られた。それゆえ女性を貶める歌がクラブの選手たちに脈々と受け継がれ、長らく女性のクラブハウスへの出入りを禁じることが可能となっていた。

ネッド・ポルスキーはアメリカにおける玉突き場の研究（Polsky, 1967）において、どのように玉突き場が女性的価値の世界から逃避する手段として作用するようになったか明らかにした。ポルスキーによれば、肥大する都市化に伴って、賭け玉突き場は、悪態をついたり、噛み煙草を吐き出したり、誰はばかることなく喧嘩をしたり、だらしない服装をしたり、大きい賭けをしたり、酔っ払ったり、売春婦を買いまくったりしたがるアメリカ人のための逃避の場所となったのだという。玉突き場はその後人気を失ったが、その理由は都市生活の社会的状況が、男性の大多数を結婚するように導き、社会的タイプとしての生涯独身者の数が少なくなったからである。業者たちによって新しい客を獲得する手段として、見てくれを良くしたり、魅力を添えたりするための試みがなされたが、その試みはかえって男性だけの下位文化と強固に結びついている昔からの常連（玉突き場を女性的価値からの逃避の場所とする男性たち）を遠ざけてしまった。

別の例として、オーストラリアの田舎の地域社会における研究では、男性がその土地のレクリエーション資源とレクリエーション活動を支配しており、仲間とのレジャーを容易にするために女性の家事能力を利用しつつ、同時に彼らの活動の多くから女性を慎重に締め出していたことを明らかにしている（Dempsey, 1990）。

このように、スポーツはその周辺で育つ下位文化と強固に結びついており、その文化はたぶんに女性排除の志向性を持っている。これは言うなればスポーツの世界のホモソーシャルリティ（同質社会、同性への友情）の傾向をあらわしている。男同士の強烈な結合への志向性は、近代スポーツにおけるさまざまな場面で確認できる。

ホモソーシャルリティ論を最初に提出したのは、イヴ・セジウィックである。セジウィックは『男同士の絆』において、シェイクスピアから19世紀までの文学テクストを対象に英文学批評を行ない、近代における社会支配の一形態としてのホモフォビア（同性愛嫌悪）

のメカニズムを説明した（セジウィック、2001）。ホモソーシャリティとは、近代西洋の家父長制における男性間の関係に与えられた名称である。近代の西洋社会が、女性を媒介とした男性間の結束と権力の授受によって構造化されていることを理論化したのは1975年以降のフェミニズムであるが、この男性同士の関係は「ホモソーシャルな欲望」の関係と名づけられた。セジウィックは「ホモソーシャルな欲望」が「ホモセクシャル」と「ヘテロセクシャル」両方を含みこんだ、男性間の関係全体を規定しているとし、家父長制の関係とホモセクシャルな関係とは構造的に一致しており、両者の境界と意味は歴史的・文化的に可変であると論じた。つまり「男への性的な欲望」と「男への性的でない欲望」の境界は非常に曖昧で、この境界は権力関係によって恣意的に定義されるものである。この研究はジェンダー／セクシュアリティ研究に大きなパラダイム変換をもたらし、レズビアン／ゲイスタディーズの理論的發展に大きな影響を及ぼした。

近代社会のあらゆる場面において、ホモソーシャリティ的傾向とホモフォビアが併存している状況が見られるが、スポーツも例外ではない。「男らしさ」にこだわるホモソーシャルが実現するためには、ホモフォビアという過剰な「男らしさ」の表出が必要である。先にあげたラグビークラブの研究でも、同性愛者を茶化したり、おとしめたりすることを中心テーマとする歌が、酔っ払った選手たちによって歌われる様子が描かれている。ラグビークラブそれ自体は、部外者にとって非常に閉鎖的で、非常に親密な男の集団である。彼らは一緒に風呂に入ったり、男だけの集まりのなかでストリップをしたり、たぶん無意識的に動機づけられたものであろうが、一般的に同性愛的にみえる行動をよくする。選手たちがゲーム中に、お互いにしっかりスクラムを組み、お互いの股の間に頭を突っ込んでいる状態は、しばしばジョークの標的にすらなる。ラグビー界に伝統的に歌われてきた歌の一つに、以下のようなフレーズがある。

おれたちはみんなホモだ。

だから、二階に上がっているあいだは失礼するぜ。

おれたちはみんなホモだ。

だから、おれたちはペアで歩き回るんだ。（シアード&ダニング、1988：245）

シアードとダニングによると、女っぽい、あるいはホモっぽいことがラグビーの歌のなかで茶化されるのは、女性への脅威の表現であるという。19世紀後半に大人のためのスポーツとして発展したラグビーは、婦人参政権運動の高まりと結びついており、女性に開かれる社会的機会や社会進出に対する不満と抵抗を反映しているのだ。女性への脅威はすな

わち男らしいアイデンティティ感が脅かされることへの恐怖であり、それゆえ女性や女っぽい同性愛が茶化されるのである。この歌の機能は、男らしさの強調、強化である。ラグビーに限らず、ロッカールームでの男性同士の会話を分析したカーリーも、「おしゃべりの断片」に性差別的で同性愛嫌悪的な傾向を強く感じ取っている (Curry, 1991)。

以上見てきたように、近代スポーツと「男らしさ」の関係についての諸研究は、「男らしさ」の表出の形として、近代スポーツのホモソーシャリティ的傾向とそれと併存するホモフォビア的傾向について詳細に分析していることがわかった。ではこの2つの方法以外に、どのような「男らしさ」の表出があるだろうか。

男性が女性よりも犯罪や社会的逸脱を犯しやすいジェンダーなのかを分析したメッサーシュミットは、近代社会においては、男性たちは、つねに「自分が男である」ということに縛られ、「男性による犯罪は、男性性を達成するために、他の資源が入手不可能なときに資源として発動される社会的実践の形態である」(Messerschmidt, 1993) とし、他者から「男らしくない」と認識されれば、自分の存在そのものの危機感を覚える場合さえあるという。とはいっても、男性たちは、自分1人では、自分の「男らしさ」を証明できない。自分が「男である」と自己認識するためには、他者からの「おまえは男である」という承認や自分の優越を賞賛してくれる者が必要となる。「この他者からの承認を獲得するためにこそ、男たちは社会的地位を求めて競争し、美しい女たちを『所有』しようとし、権力を追い求めるのだということもできるだろう」(伊藤、1998: 87)。しかし他者の承認によってしか自己証明ができないということは、大きな矛盾を含んでいる。男たちは「女」を支配しながらも、「女」に依存しなければ、自らの「男」としてのアイデンティティを確保できない。この他者によってしか「男らしさ」が証明できないという大きな矛盾が「男」たちに、『男のメンツ』意識という重い鎧を身につけさせ、能力以上の『無理』を強い、弱みを隠蔽させ、力を示すことを要求するのだ」(同上: 88)。確かに、スポーツの世界では「ノーペイン、ノーゲイン」という言葉にあらわれるように、肉体的・精神的苦痛を乗り越えることを強い、怪我や故障もごく日常的な出来事として捉えられている。女よりも男にその強制力が強く働いているのは確かだ。

したがって、スポーツの周辺で育つ下位文化における「男らしさ」の表出、表現の形態は、近代スポーツの(1)ホモソーシャリティ的性質からくる女性排除、(2)ホモフォビア的性質からくる同性愛および「男らしくないもの」の禁止にくわえて、(3)「男」アイデンティティの確保のために他者からの承認を必要とすることからくる女の所有、称賛者の確保、(4)「男のメンツ」を守るプレッシャーからくる、能力以上の行動、弱さの隠蔽、力の表示という4点によって、さしあたり分類することができるのではないだろうか。

スポーツの下位文化における「男らしさ」の表出

- 1) ホモソーシャルティ（女の排除）
- 2) ホモフォビア（同性愛および「男らしくないもの」の禁止）
- 3) 他者からの承認（女の所有、称賛者の確保）
- 4) 「男のメンツ」を守るプレッシャー（能力以上の行動、弱さの隠蔽、力の表示）

本論ではこの4つの軸にしたがって、サーフィンというスポーツの世界における、「男らしさ」と密接に結びついた下位文化を分析していく。

2 サーファーの世界

スポーツと「男らしさ」の関わりを検討するにあたり、本論ではサーファーの世界をとりあげている。サーフィンの世界には、男性達による「男らしさ」の表出が典型的・集約的にあらわれると考えられるからである。サーファーの世界は「男らしさ」に結びついた下位文化を有し、「男らしさ」の表現が豊富に見られる。このような日常的な実践によって、サーファーの世界のジェンダーによる支配関係が構築されている。サーフィンの周辺で発達する下位文化が「男らしさ」と結びつきやすいのは、様々な理由が考えられるが、第一には若者が文化の中心的な担い手であるからだ。そして第二は、一般的なイメージとしても実際の世界でも、サーファーは男性が大多数であり、男性によって世界が構成されているからである。概して若者文化と性差別的な表現とは深いかかわりがある。若者文化の多くは対抗文化の要素を含み、「良識ある大人」の眉をひそめさせるのが目的である。したがって、例えばラップ・ミュージック、バイク、サーフィンなどの下位文化の表現は、「男らしさ」に満ちている。スポーツの周辺で育つ下位文化と「男らしさ」の関わりを検討する際、本論でとりあげるサーファーの世界は非常に適当な事例となる。

サーファーについての研究は、主にアメリカとオーストラリアでなされているが、それぞれ様々な素材が扱われ、様々な分析・記述スタイルが採用されている⁽³⁾。本論で採用するのは、エスノグラフィー的な調査・記述方法である。エスノグラフィーとは、異文化を自分で見聞きした資料によって記述すること、調査者自身が異文化と積極的に関わり、人間関係を築き、周囲への／からの働きかけの中で経験したことを記録することである。な

⁽³⁾ 例えば、サーフィン雑誌をテキスト分析したもの（フィスク、1998）、サーフィン・クラブ（Pearson, 1979）やサーフィンの流行の歴史的変遷を追ったもの（Irwin, 1973）、研究者自身の経験から身体論的に近代との関係を論じるもの（清水、1993）などがある。

かでも特に「私の目・私の考え」を積極的に取り入れた一人称のエスノグラフィーのスタイルを採用するが、それは本論がジェンダー不平等な関係性と規範の具体的な創出過程を追うことを目的としているためである。スポーツをする者が日常的な実践によって構築するような権力関係は、実際にフィールドにおいて共にスポーツをするを通じてしか見ることはできない。日常生活に秘められた政治性を意識化し、その中で生まれる創造性や抵抗性のメカニズムを浮き彫りにしていきたい。

2-1 サーフィンとサーファーの定義

まず、本論で関連がある範囲で、サーファーの世界を簡単に紹介しよう。

＜サーファー＞とはサーフィンをする人のことで、＜サーフィン＞とは広義に解釈すれば、波に乗る行為を指す。波に乗る行為は、自分の体だけで波に乗るボディサーフィンの場合もあれば、サーフボードを使って乗る場合、ボディボードを使う場合、カヌーやヨットを使う場合、等々を含める事が出来る。しかしながら、本論中で＜サーファー＞、＜サーフィン＞という言葉を用いるのは、もっと限定された意味においてである。簡単に整理してみよう。

サーフィン —— サーフボード、ボディボードを用いて波に乗ること。サーフボードにはさまざまな種類があるが、ここでは特に約200cm弱のショートボードと呼ばれるボードを指し、ボディボードは約100cmほどのスポンジ製のボードを指す。

サーファー —— サーフィンをする人のことで、ボディボードをするボディボーダーとは区別する。調査対象としたX・サーフ・ショップ（以下、Xサーフ）の所属人数は20～30名前後⁽⁴⁾。

場 所 —— Xサーフは名古屋市の某工業地区に位置する。チーム員はほとんどが市内に居住している。サーフィンをしに行くのは伊良湖と呼ばれる愛知県渥美半島の表浜周辺を中心とする海岸である。季節や波の状況に応じて、静岡県、

⁽⁴⁾ Xサーフのサーファーと知り合ったのは1995年冬である。友人を介してチーム員の何人かと食事をしたのが始まりで、数ヵ月後に私はボディボード用具を購入し、毎週のように一緒に海に行くようになった。参与観察法を主体とし、フィールド・ノート、ビデオ、写真に調査結果を記録した。その他、インタビュー調査やあらゆるメディア（テレビ、ラジオ、ビデオ、映画、インターネット、本、雑誌、新聞）からの情報収集を行なった。知り合ったサーファー達は、出会った頃から現在に至るまで、私にとって調査対象というよりもまずプライベートなサーフィン仲間である。本論を発表することについては、彼らの承諾を得ている。

福井県、鳥取県、高知県、三重県などにも足を伸ばす。長期の休みがある場合はこれに限らず国内外の海へ出かける。

時 —— 原則的には週末に海に行く。よくあるパターンが、仕事を終えた金曜あるいは土曜の夜に海に向かって出発し、伊良湖に到着後、軽く仮眠を取って日の出とともにサーフィンをし、日曜の日没までサーフィンをして名古屋に帰るといったもの。平日はほとんどのチーム員が定職やアルバイトの仕事をしている。ショップに来るのは仕事が終わった平日の夕方以降が多い。

内 容 —— 伊良湖に行き、ショートボードでサーフィンをする。サーフィンの合間に、食事をとったり銭湯に行ったり、波がなければ他の遊び（釣り、ゴルフ、サッカー、ゲームセンター、パチンコ等）をすることもある。一日に3ラウンドくらいサーフィンをする。1ラウンドは大体2時間前後。

本論では、Xサーフのオーナーを中心に、以上の様な行動様式をもつ人々の集団を＜サーファー＞と定義する。

2-2 X・サーフ・ショップとチーム員

正確な数字は把握できないが、1995年の時点で日本のサーファー人口は100万人を超えたといわれている。現在Xサーフのようなショップは全国各地に多数存在する。ショップの規模は、例えばムラサキスポーツや丸井スポーツなどのような全国チェーンの大型小売店から、Xサーフのようにオーナーが副業として経営し、宣伝も行なわず顧客も30名ほどの小規模の店まで多種多様である。全国チェーンの大型店や顧客を多く抱える比較的規模の大きなショップでは、板やウエットスーツ⁽⁵⁾などの道具を無料あるいは安価で提供されるライダーと呼ばれるサーファーを抱え、宣伝を行なっている。一方、Xサーフは利益を上げることが目的ではなく、友人同士が集まる口実のために開店した経緯があるので、チーム員同士の関係も密であり、アットホームな雰囲気包まれている。

ショップの果たす役割はその規模や目的に応じて様々であるが、Xサーフでは主に、(1) 用具購入・修理、(2) 情報交換の場所としての役割を担っている。用具の購入に際しては、ショップの店員やオーナーに相談して自分の技量にあった道具を選ぶことが求められる。用具は消耗品であり、季節ごとにも装備が変わるので、用具購入のためにサーフ

⁽⁵⁾ 防寒・保護目的の身体にぴったりとしたスーツ。ゴムやジャージーの素材で作られている。季節に応じてさまざまな厚さがある。

ァーたちは定期的にショップを訪れている。ショップの役割のなかで最も重要なのは、二つ目に挙げた情報交換の場としての役割である。Xサーフではメンバー同士が親密なつきあいをしているので、メンバー同士のたわいもない日常会話は、サーフィンをする上での楽しみの中で、非常に大きな部分を占めているのである。また、サーフィンに関するさまざまな情報についての意見交換は、サーフィンをするのに良い場所を選ぶ際やサーフィンのレベルアップのために欠かせないものである。サーファーたちは常に周囲のサーファーとコミュニケーションを取っている。

X・サーフ・ショップは1994年夏、名古屋市内南部の工場地帯にオープンした比較的歴史の浅いショップである。当初客はオーナーの友人だけであったのが、口コミで人が集まっていった、流動的ではあるが現在では20～30名が顧客として通う。彼らはチーム員と呼ばれ、ショップのなかで「身内」として扱われる。単に用具のみを購入しにくる客や、チーム員たちと特に親しくすることを目的としない客は「お客さん」として扱われているようだ。全体的に見ると、チーム員たちの特徴は、男性、20代から30代、高卒が最も多い⁽⁶⁾。オーナーの友人がまずショップにやってきて、その人たちが次に学校の同級生や後輩を誘い、その中でサーフィンを続けたものがまたその友人を誘い、というようにしてメンバーが増えていく。女性のメンバーは極端に少ない⁽⁷⁾。

⁽⁶⁾ 本論に登場するチーム員を紹介する。これはチーム全体の一部である。

K野：男、昭和37年生まれ。Xサーフのオーナー。サーフィンを始めたのは19歳のとき。現在は工作機械の設計からメンテナンスまでを引き受ける会社を父親から譲り受け、妻と3人の子どもとともにショップ兼自宅に住んでいる。

M田：男、昭和39年生まれ。M田もごく若いときにサーフィンを始めた。K野と16歳のときに知り合い、現在も付き合いが続く。彼は現在中国で宝石鑑定の仕事をしている。私をXサーフに来てボディボードをするように誘ってくれたのが彼である。

S藤：男、昭和41年生まれ、Y中：男、昭和41年生まれ。K野が他店の店長時代にやってきた。後輩にあたるS藤とY中は、同じ中学校に通った同級生で、非常に付き合いの長い親友同士である。サーフィンを始めた高校生の頃は電車で通った。卒業後K野に出会い、Xサーフがオープンするとチーム員となった。現在の彼らはそれぞれ某大手企業の営業職についている。

T田：男、昭和42年生まれ、O田：男、昭和42年生まれ。T田とオーナーのK野は、Xサーフが開店する前からの知り合いで、T田はK野の妻の友達の弟に当たる。実家は有名な製菓会社を営んでいる。O田はT田の同級生で、自動車会社のテストライダーをしている。

F田：男、昭和45年生まれ。F田の妻の兄がサーファーだったので、F田はXサーフに来る前からサーフィンを始めていた。現在一児の父となり、商社の営業職に就いている。

N部：男、昭和46年生まれ。N部はもともと電車で海に通うサーファー（通称：電ファー）だったが、あるときK野の知り合いであるY川が海に行く途中、歩いているN部をひろって乗せてやったことから、現Xサーフの前身であるショップに通うようになり、現在のXにやってきた。

A部：男、昭和52年生まれ、K川：男、昭和52年生まれ、K端：男、昭和52年生まれ、N尾：男、昭和51年生まれ。A部とK川はXサーフが開店してすぐやってきた、いわゆる飛び込みの客である。2人がサーフィンを始めるのを決意すると、彼の同級生であるK端、N尾もショップにやってきて、チーム員となった。この4人は高校は別だが、中学校の同級生である。K端はK野の会社で勤めていて、今年で4年目になる。夜はN尾とともにXサーフで店番をしている。

2-3 上下関係

Xサーフは経営規模が小さく宣伝活動を行っていない事から、通りすがりの客が入ってくることは少なく、ほとんどが既に所属しているチーム員と友人関係、学校の先輩・後輩関係にあるなど、なんらかのつながりがある者が参入してくる。そして彼らの社会的背景は似通っており、サーフィンをはじめた動機やきっかけなども共通する点が多いことがわかる。それはつまり、男性が同性の友人を誘い、その友人がまた同性の友人を誘って、という男たちの連鎖であり、結果的に「自然と」男だけの世界ができあがっていく。ショップ内には、有志による自由参加の集団ではあるが、いわゆる体育会系のクラブのように、若干の上下関係が存在していた。その上下関係はもちろん男性同士の関係であって、女性はほとんど含まれていない。

社会人スキークラブの仲間関係を分析した宇部によると、クラブの「タテ」関係は（1）クラブへの入会年数、（2）スキーの技術、（3）年齢によるものであるとしている（宇部、1995）。Xサーフの中でも、明らかにこの三つの基準による上下関係が存在していた。

年齢による上下関係はサーファー相互の呼びかけや言葉づかいに現れている。例えばオーナーのK野は、ショップに最もコミットしている20人くらいのサーファーの中で最年長であり、皆が彼のことを「K野さん」と、「さん付け」で呼びかけ、しかも「です・ます調」の敬語・丁寧語で話をする。同年代同士や年下へは、呼び捨てか「あだ名」での呼びかけ

T橋：男、昭和51年生まれ、H：男、昭和51年生まれ、K：男、昭和51年生まれ。T橋はもともとN尾と同じ空手道場に通っており、N尾を頼ってXサーフにやってきた。HもN尾のついでにXサーフに来てサーフィンを始めた。KはA部らの同級生で、サーフィンを始めて今年で2年目になる。N尾と交際している女性の女友達と交際していることから、Xにやってきた。現在は派遣会社に勤務する。

I藤兄：男、昭和51年生まれ、I藤弟：男、昭和54年生まれ。I藤兄はA部たちの同級生らと一緒にXサーフにやってきてサーフィンを始めた。弟の方はその後でやってきた。二人とも運送会社に勤務している。

A：男、昭和55年生まれ。今年22歳になるX一番の若手サーファーであるAは、父親が現役のサーファーで、Xサーフの客であったことからこの店にやって来た。彼が一番最初にサーフィンをしたのは4歳の頃だった。建築資材の会社に勤めている。

(7) <女性チーム員>

M原：女、年齢不明。T田がXサーフに来たときに交際していたのがM原で、彼女は「彼と同じ趣味があった方がいい」と思ってサーフィンを始めた。Xサーフ初の女性サーファーだった。保育士の仕事をしていた。その後T田との交際を打ち切ると、ワーキングホリデーを利用してオーストラリアへ移住し、Xサーフとの連絡はそれ以後なくなってしまった。

K武：女、昭和55年生まれ。Xサーフには女性サーファーが二人しかおらず、彼女はそのうちの1人である。高校生の頃、すでにXサーフの客であったN羽の紹介で店に来た。

A川：女、昭和48年生まれ、T川：女、昭和46年生まれ。A川はT田と知り合って、ボディボードをするためにXサーフにやってきた。当時、私はXサーフのアルバイト店員だったので、彼女に接客し道具購入の手伝いをした。偶然にも私の同級生であったT川と同じ小学校に通った者どうしで、顔見知りであった。その後A川は結婚してボディボードをやめ、T川もボディボードから遠ざかっている。

となる。「です・ます調」と言っても、時折同年代の友人へのような言葉づかいになることもあり、「～っす」・「～っすよ」などのバリエーションがある。この年上の名前への「さん付け」と「です・ます調」は最も堅固なルールであるようだ。なぜならば、このルールはほかの二つの基準である入会年数と技術で低いところに位置していても、ほとんど決して破られることがないからである。つまりどんなにサーフィンが下手でも、ショップに来たばかりで何も分からなくても、年が上の場合は必ず「さん付け」と「です・ます調」で扱われる。

所属年数による上下関係も、言葉づかいに現れる。言葉づかいの崩れが、関係の経過年数が多いほどよくあらわれてくる。たとえば、オーナーのK野のすぐ下の世代であるS藤とY中は、K野に話をするとき、時折「です・ます調」が崩れて「～でしょう」などとなる。基本的には敬語の線が守られているが、彼らのように年が比較的近くてつきあいが長いと容認されるようだ。しかし彼らでさえもK野を「さん付け」以外では決して呼ばない。S藤やY中の下世代のA部やK端も、年上への「さん付け」をする。ショップにきた当初の彼らも、上の世代への緊張感があって「です・ます調」の崩れは見られなかったが、所属年数が長くなってそれが時おりみられるようになった。

技術による上下関係は、海に入ると歴然とする。誰が上手かということが、一瞬にして明らかとなるからだ。上手な人は数多く波に乗るし、サイズのある波でも要領よく沖に出て、人一倍素早くテイクオフ（波に乗り始めるときの動作）し、波に応じて多様な技を繰り出すことができる。海の中における上下関係については、この技術という基準が非常に大きな部分を占めるといえるだろう。しかし、それでも仲間内では年長者が追いかける波を横取りしようとする事は少ないし、ドロップインといって途中から割り込んで波に乗ることも、上から下へは笑って許されている。

以上がXサーフにも共通してみられる、スポーツクラブ内の上下関係を決定する三つの基準である。ただしそれは場所や状況に応じて非常にフレキシブルに変化するものであるということは付け加えておきたい。例えば私は年齢がチームの中で高いほうにあって、普段は年少者から敬語を使われていることが多いが、海の中でのサーフィンの技術は劣る。そうすると陸の上での関係と海の中での関係は一致せず、時と場合によって変化してくる。また、たとえ場を限定して考えても、必ずしもこの三つの基準だけで上下関係を捉えられない場合もある。例えば、誰から見てもある2者に技術の優劣が存在し、しかも年齢差も入会年数にも差があったとする。しかし、技術的劣位にある者が年少者であり、今後の成長が大いに期待できる場合、あるいは大変な努力をしていることが見て取れる場合、あるいはまた体調やその日の波などあらゆる条件が劣位の年少者に味方した場合、その日最も

称賛や認知を得られるのは彼になる可能性が高い。2者の間に上下関係はいぜんと存在するであろうが、特定の状況を具体的に捉えた場合、微妙な変化があらわれうるということは記しておきたい。

さらにこの三つの基準以外に、チーム員の上下関係を定めるものという論点から少しずれるが、Xサーフのなかでは個人の「魅力」というものが、その人を特徴付けるのに欠かせない要因となっている。個人の魅力はそれこそ多種多様で個別的なものであるが、しいて挙げるなら例えば会話が面白い、役に立つ、一緒にいて楽しい、話題に事欠かない、外見的に魅力がある、センスがある、あるいはとりたてて特徴がなくても素直である、誠実である等々であろう。いずれにせよ、サーフィン自体とは少し離れて、仲間として楽しいか、魅力があるかという点が、その人の集団内での位置を定めるときに非常に重要となってくる。というのも、特にXサーフは、サーフィンのレベルアップだけが目的というよりも、ほとんどのチーム員が仕事や家族を持った上でサーフィンを続け、仲間とのコミュニケーションがサーフィンの楽しみの大きな一部を占めているので、楽しくサーフィンできるかどうかという点は彼らにとって大きな関心事となるためである。

3 X・サーフ・ショップにおける「男らしさ」の表出

Xサーフの人間関係は、先に述べたようないくつかの基準によって定められ、「男同士の友人ネットワーク」からなっていることが明らかになった。そもそもXサーフは口コミによる参加が最も多いショップであるので、男性のオーナーがその友人を誘い、友人がその後輩を誘い、その後輩がそのまた後輩を連れてくるということが繰り返されれば、「自然と」チーム員は男性が中心となっていく。加えて女性サーファーは上達の速度が遅く、サーフィンを開始する年齢も遅い場合が多いので、年数や技術で定まる上下関係において、男性のチーム員たちに比べて微妙な立場に立つ事が多い。男性のチーム員の方がシンプルな立場に置かれているのである。この男女の差異が影響するなかで、サーファーの世界の下位文化はどのようなものとして立ち現れてくるだろうか。先にまとめた、スポーツの周辺で育つ下位文化において表出される「男らしさ」の4つの軸、つまり（1）ホモソーシャルティ（2）ホモフォビア（3）他者からの承認（4）「男のメンツ」を守るプレッシャー、にしたがって、サーファーの世界を見てみることにしよう。Xサーフのチーム員たちは、どのようにして「男の世界」を作り上げているのだろうか。

3-1 ホモソーシャルティ（女の排除）

Xサーフのメンバーたちは、私自身も含めて、仲間と一緒に酒を飲むのが好きだ。ショップに来た頃、全く飲めなかった若者がどんどん酒に強くなっていく様子を、幾度となく目の当りにした。それくらい一緒に酒を飲む機会が多い。サーフィンの合間や終了後、缶ビールを飲んだり居酒屋に行ったり、海でバーベキューをしながら、あるいは泊りがけで忘年会を開催して飲む。またサーフィンとは別に、市内の繁華街へ飲みに行くこともある。大量に飲んで酔うこともしばしばあった。少なくとも私が観察したXサーフでは、サーフィンとアルコールは相互に深く結びつき、しかもセックスにも密接に結びついているようだ。

Xサーフのサーファーたちはよくコンパに参加する。ここでいうコンパとは、女性と男性がほぼ同数集まって行なう飲み会のことである。ここで彼らは女性と知り合って親密な関係に至ることがある。既婚者は参加しないようであるが、特定の交際相手がいることと他の誰かと知り合って親密になることは矛盾しない。彼らの言葉で言えば「全く別物」なのだ。また、サーフ・トリップと呼ばれる国内外のサーフィンを目的とした旅の中でも、女性との出会いやつきあいは、実際に行動を起こすかどうかはともかくとして、楽しみのひとつになっている。サーファーたちが潮の満ち引きを調べるために見る「ビーチコーミング」という汐見表には、全国のサーフ・ポイントの紹介とともに、その土地の見知らぬ女性に声をかけるナンパのテクニックやナンパの場所、風俗店の紹介・感想などが以前掲載されていた⁽⁸⁾。私は女性であるので、彼らがコンパをしている場に居合わせたことはないが、海で女性を品定めしたり声をかけたりする場面はしばしば目にした。

サーファーの下位文化の中におけるセックスとアルコールの関わりのは強さは、女性サーファーたちと比較すると明確になる。女性たちにとっては、私が見る限り、男性に比べてそれらは薄いつながりしかない。深酒や奔放な性は、一般社会でも男性により寛容に許される行為である。女が関わることでできない男だけの世界は、このようにコンパやナンパをして女性と関わることによって上手く実現されている。

サーフィン以外でも彼らはパチンコや麻雀、釣りをするなどして遊ぶ。これらは女性がほとんど排除されたところで行われている。もし女性でもパチンコや麻雀に興味があれば仲間に加わることができるかもしれない。私も釣りは一度だけ一緒に行ったことがある。しかし、女性がそのようなことに興味をもたないことが多いという事実の前に、彼らがそ

⁽⁸⁾ Beach Combing (1995; 1996; 1997; 1998; 1999).

れらのことを仲間と一緒に行なうということは、女性と区別された時間を共有することであり、男らしさを結果として呈示しうるといえよう。

映画の世界でも現実の世界でも、女性によく「のけもの」にされ、待たされることで、男だけの世界が作られている。サーファーの間で冗談半分の話題になるのが「私とサーフィンとどっちが大事？」というセリフで、交際相手の女性がサーフィンとその仲間に没頭しすぎることに對して非難をする。イギリスのサーフィン映画『ブルー・ジュース』でも、いい波が来ると彼女とのデートをすっぽかしてサーフィンに出かけるサーファーが出てくる⁽⁹⁾。『ハートブルー（原題は『ポイントブレイク』）』というアメリカ映画でも、サーファーの仲間同士で銀行強盗をする場合、それまで登場していた仲間の女性サーファーはいつのまにか除外されていて、男同士のあつい友情が表現されているのである⁽¹⁰⁾。

3-2 ホモフォビア（同性愛および「男らしくないもの」の禁止）

Xサーフでは男性のチーム員全てがショートボードと呼ばれる板に乗るサーファー（ショート）である。一方、女性のチーム員の場合はボディボードに乗るボディボーダーとサーファーの両方がいる。少なくとも彼らのフィールドである伊良湖では、サーファーもボディボーダーも同じような場所で同じような波に乗るので、道具に違いがあるだけだが、この男女差はどこからくるのだろうか。

まず、Xサーフに初めて足を踏み入れたとき、新しく来た人が男性で、もし彼がどのようなボードに乗るのか迷っていたら、オーナーもチーム員たちも間違いなく「やっぱり男ならサーフィンでしょう」と言って、サーフボードに乗ることを勧める。しかもその人が若ければ、ショートボードと呼ばれる短い板を勧める。ショートボードは板が短い分、鋭いアクションをすることが可能になるのだが、バランスを取るのが難しく、著しく体力を消耗するので、年をとってから新たに始めるのは困難だ。だが、Xサーフのサーファーたちにとっては、やはりショートボードに乗ることが「かっこいい」ことなのだ。

ロングボードと呼ばれる長いボードは、ボードが長くて安定感があるので、とりあえず波に乗ることは容易であり、ゆったりとした雰囲気には最近は人気が集まっている。しかし、

⁽⁹⁾ 映画『ブルー・ジュース』は、1995年に公開されたイギリス映画で、監督はカール・プレジェザー、出演はショーン・パトウィー、キャサリン・ゼタ・ジョーンズ他。海をこよなく愛し、サーフィンのこの上ない魅力に取り付かれている主人公は、肉体的な衰えや結婚を迫る恋人との関係に悩む。仲間とサーフィンに明け暮れる30歳を目前にした主人公の決断の時を描く映画。

⁽¹⁰⁾ 映画『ハートブルー』は、1991年に公開されたアメリカ映画で、キャスリン・ピグロー監督、キアヌ・リーブス、パトリック・スウェイジ他出演。物語の舞台はカリフォルニアのベニス・ビーチ。サーファーが絡んだ連続強盗事件に、FBI検査官が自らサーファーとなって潜入捜査を試みる。

ロングボードに対して、年をとって体力がなくなっからするものという固定観念を抱いている人がいるのも事実で、若い男性はショートボードを好む傾向があり、Xサーフでもロングボーダーはほとんど存在しない。

ロングボードよりもさらに敬遠されるのはボディボードで、Xサーフに男性のボディボーダーは存在しない。一度だけ道具を買って始めた人がいたが、すぐにやめてしまってショップに来なくなった。サーフボードと異なり、ボディボードは腹這いで板に乗り、しかも足にフィンと呼ばれる足ヒレをつける。その姿がどうも男性サーファーの多くに受け入れられないようなのだ。男性のボディボーダーが影で嘲笑の的として扱われているのを、インターネット上のコミュニケーションや現実の会話の中で実際によく見聞きしたし、率直に言って私自身もその価値意識を内面化しており、男性のボディボーダーより、そして男性ロングボーダーより、ショートボードに乗る男性サーファーの方がはるかに「かっこよく」見えてしまうのである。

一方、新しく来た人が女性の場合、対応は全く異なる。私がはじめてXサーフのチーム員であるM田と知り合ったとき、彼は私にボディボードを薦めた。実際にXサーフに行ったときは、オーナーのK野から、「サーフィンじゃなくてボディボードなの？」と尋ねられたが、私は体力と運動神経に自信がなかったので、とりあえずは安全で容易に波に乗れるボディボードを選んだ。そして私の後にも数人のボディボーダーが来たが、やはりいずれも女性であったし、チーム員と交際中の女性たちも、彼と一緒に海で波乗りを楽しむとき、ほとんど全員がボディボードを選んでいて。私が所属する前に1人だけ女性でショートボードをするM原がいたが、彼女はチーム員との交際に終止符を打ってからショップに来なくなり、今では継続しているかどうかかわからない。その後、女性サーファーK武が1人誕生し、私もボディボードを始めて4年後にサーフィンに転向した。

今ではXサーフにK武と私という2人の女性サーファーが所属していることになるが、男性は次々と新しい世代に受け継がれているのに比べて、女性には全く変化がないまま3年が経過した。女性サーファーがここ数年非常に増えてきて、業界にも大きな変化が見られるようになったが、まだまだ男女比率のアンバランスさは大きく残っている。ショートボードは男性的なもの、ボディボードは女性的なものであるという固定観念が、Xサーフの中そしてサーファー社会一般に、今でも存在する。Xサーフでは、女性サーファーが増えないという現実の前で、数的にも勝る男性が中心となってこの世界は構成されている。男性のチーム員が気軽に交際中の女性を連れて海やショップに来るのに対し、女性のチーム員はそうしない。あらゆる側面でXサーフの人間関係が男性中心に営まれているのである。「男ならサーフィン」という「常識」がこの世界の「男らしさ」・「男の世界」をよ

く表現している。

若者文化と性差について、イギリス人のポピュラー文化研究者ジョン・フィスクは次のように言う。

……たいていの若者文化が持っている性差別的な傾向に注意を払っておくのはむだではあるまい。若者文化の内部ではおおかた男性の行動と女性の行動ははっきりと区別されていて、男性は行動的で優位な立場にあり、女性は受身的で従属的な立場におかれている。バンやバイク、サーフボードは昔から男の乗り物と決まっており、大きさやテクニク、装飾は男たちの序列を表すものである。(フィスク、1998：98)

フィスクによると、特にサーファー文化は「露骨な男性優位主義」に満ちており、サーフィンの持つ反体制的な性格はこのことにより腰砕けになっていると、批判に満ちた分析をしている。確かに男性がサーフィンで女性がボディボードをしているビジュアルそれ自体を見ても、男性がボードの上に立って波に乗り、波を切り裂く技を繰り出すのに対し、女性はボードの上に腹ばいになってサーファーよりも低い位置で波に乗り、ボードの特性からして波を切り裂くというよりは、波の上で回転するので優雅な感じがし、攻撃的なイメージからは遠く、その関係性の「優劣」を明確に象徴しているように見える。

3-3 他者からの承認（女の所有、称賛者の確保）

サーフィンを始めたのは「女の子にもてたかったから」とであると、何人ものサーファーの口から聞いたことがある。サーフィンを続けていく原動力は、そのうち別のものに変化することが多いと思うのだが、サーファーたちと女性たちとのかかわりは、あらゆる点で密接なものであり、サーファーの世界は、サーフィンをしない女性も含めて、女性の存在なしには成立しえない。男として「カッコいい」自分になるためには、やはりそれを証明してくれる他者の存在が欠かせないので、女を所有し、サーファーである自分を称賛してくれる他者が必要だ。だからサーファーの一部あるいは多くは、コンパやナンパを継続的にして所有する女を確保するし、交際相手である「彼女」がたとえサーフィンをしていなくても、海やショップに連れて来るなどして、この世界に関わらせている。さらには、既婚者の男性サーファーが、妻以外の女性を連れて海に来たり、海外へのサーフィン旅行へ出かけていったりする様子も、Xサーフ以外の場で幾度となく目にしてきた。これはXサーフのサーファーの特徴というよりも、サーファー全体についてのひとつの傾向である。

サーファーの世界は、サーフィンをしない女性も含めて、女性の存在なしには成立しえないとする理由は、いずれの場合も男女の逆転はありえないからだ。つまり女性サーファーがコンパやナンパをして、所有する男を確保し、自分が女であることを確認しなければいけないというのはあまり考えられないし、交際相手がサーフィンをしない男性であれば、この世界に関わらせようとはしない。一緒にボディボードをしていたA川は、交際相手の男性が非サーファーであり、サーフィンをするのを快く思われず、結婚を機にサーフィンをやめている。Xサーフ以外の女性たちの場合も、サーファー以外の男性と交際していて、相手が理解したうえでサーフィンを継続している例はなかった。サーフィンを辞めるか、あるいは交際・結婚をやめるかという選択を迫られていた。

フィスクが言うように、女性をハントするのは、男性サーファーにとって日常的でごく「自然」なことなのだ。

サーファーにとっての女性は、いっしょに乗せてもらうか見物人であるほかはなく、また男たちにとってそういう女たちはいち早くモノにし、自分の女にしてこれ見よがしに連れて歩いてみせるべき獲物なのである。サーファーの文章でも、波を征服することと女をモノにすることが重なったり混ざり合ったりしていることが多い。「昼、獲物を仕留めよ。夜、獲物をしとめよ」(同：98)

だから男性のようにサーフィンをしてしまう女は、サーファーにとって獲物に相当せず、「おとおんな」のようになってしまって、彼らにとって「食えない」女となる可能性が高い。女性サーファーは男性サーファーよりも、はるかに「健全」なイメージがある。その一因はこのような点にあるかもしれない。

3-4 「男のメンツ」を守るプレッシャー（能力以上の行動、弱さの隠蔽、力の表示）

ホモフォビアのところで見たように、「男ならサーフィンという常識」は、体力や運動能力に自信のない男性や「男らしさ」を共有しない男性を排除し、その常識を受容する男性たちにとっては、より早く一人前のサーファーになるための努力を強いるプレッシャーとなる。Xサーフのメンバーたちを見ていると、サーファーと認められるために費やされる時間や労力は膨大であることがわかる。そのようなコストを払ってでもサーフィンを続けるのは、サーフィン自体の魅力もさることながら、周囲の仲間たちからの叱咤激励があ

るからだ。

私は当初、率直に向けられる叱咤に慣れることが出来ず、傷ついたり憤慨したりしていた。しかし思いがけず褒められたり、暖かい励ましの言葉がかけられるときがあり、そのときの喜びはひとしおで、結局サーフィンが楽しいものに思えた。例えば、初心者頃は波が少しでも大きいと沖に出ることが困難となる。波に乗るためには、波が崩れる場所である沖に出なければならない。しかし出られないとメンバーたちから自分と同じくらいのレベルのサーファーと比較され、非常に恥ずかしく悔しい思いをさせられる。暗澹とした気持ちで岸に座って沖にいる皆を眺めていると、「休むなんて10年早い。えらくても（身体が辛くても）やるから体力がつくんだ」と叱られ、絶望的な気持ちに追い打ちをかけられた。

特に男性サーファーの場合、その叱咤は女性と比較されて執拗に向けられることもあり、先輩たちの期待に答えられないわけにはいかない。女性サーファーが大きな波で沖に出ていたら、男性サーファーは負けるわけにはいかないのである。そのほか、「寒い、怖い、疲れた」などの態度や言葉も、男たちは表に出さずに耐えている。冬の厳しい時期にも、夏と変わらず海に来る女性は、男性よりも圧倒的に少ない。この叱咤激励によって、Xサーフの男性たちは、「男のメンツ」にかけて自分の能力の限界を超えることを要求され、結果として女性よりも速い速度で上達しているのではないだろうか。

また、「男のメンツ」にかけて女性を保護することでも、「男らしさ」は表出されている。例えば私はXサーフの中で年長の方にあたるが、彼らと飲食を共にすると、「女の子」として安い価格を負担させてもらえることが多い。これは彼らが年下でも年上でも同様である。また、サーフィンの技術も私のほうが劣ることが多いため、技術について教えてくれる。そして、海の中で見知らぬサーファーの不注意で私が危険な状況に陥ったときには、すかさず傍に来てそのサーファーを叱り飛ばし、私に怪我がないか心配してくれるのだった。また、5つも年下のサーファーが冗談で私を呼び捨てにしたり、年下に対するようななれなれしい口調で話し掛けたりすることがある。私自身も周囲も思わず笑ってしまうほえましい光景だが、このような冗談や先に述べた優しい保護は、「男らしさ」を結果として表現する事例の一つであるだろう。

4 「男性文化」の再生産と最近の変化

4-1 忠誠心のチェック

これまでXサーフにおける「男の世界」について詳しく見てきた。男だけの世界や男同士の関係性は、サーフボードという道具を通じて、あるいはアルコールを通して、コンパやナンパを通じて女性とつきあうことによって、女性抜き場を共有することなどを通じて実現されている事が明らかになった。このような「男性文化」は、Xサーフ内の秩序の核となるもので、これに従うことができれば、親密な仲間関係に加わることは困難となる。私がXサーフのメンバーたちと関わる中でよく見聞きしたのは、この「男らしさ」と密接に結びついた下位文化に対して忠誠心を抱いているかどうかをチェックするジョークや笑いである。このようなジョークや笑いを仕掛けられた人は、怒ったり非難したりせずに、忠誠心の証である笑いやジョークで返答できるかどうかを試されている。

レストラン文化のエスノグラフィーで、厨房におけるコックの世界を描いたファインは、厨房をジョークの共和国であるとして、そのジョークの分類や意味の分析をしている(Fine, 1996)。組織文化はユーモアの表現と結びついていることが多く、ユーモアを交えた言説は、組織の構築にとって重要であるという。実際、ジョークは厨房の仕事の楽しみの半分を占めると語ったコックもいた。コック達のジョークは、悪ふざけ、からかい、いたずらという3種類である。食べ物やナイフで悪ふざけをして緊張をほぐしたり退屈から逃れ、からかうことでコミュニティのしるしや仲間意識を確認し、いたずらで優越感という社会的意味を伝達する。ファインはヒューズの次の言葉を引用している。

「規則のなかで最も重要な問題の主題は、本当の同僚を認める基準、安全なのは誰かということを決める基準、誰に対して距離を取るべきなのかという基準をうち立てることである」
(Hughes, 1972: 341)

ファインはヒューズの説をコック達の冗談の応酬に適用して、からかいや悪ふざけなどを受け取る側の反応が試されていると考えた。つまり、その冗談がうまくかわせたり、また冗談を返すことができ、共に楽しむことができれば、コミュニティの本当の一員、友人として認められるのである。ファインの観察したレストランでは、内気で女性らしい女性コックがこのからかいに耐えることができず、結局退職に追い込まれてしまった。

私が経験した忠誠心のチェックを紹介しよう。ショップに通いはじめた頃、数人のメン

バーから「女紹介しろ」とか、私の女友達と「コンパしよう」と、顔を見る度に何度も言われた。右も左もわからず、ひたすらショップに馴染もうとして余裕のなかった私は、自分のことでも精一杯であるのに、なぜ彼らに新しい友人など紹介しなくてはいけないのか、さっぱり理解できなかった。そしてその言葉に次第に気分を害するようになった。口にごそ出さなかったが、私の不快感は表情に表れていたようで、その言葉は私を「本気で怒らすから言わないほうがいいと思った」とメンバーたちに後から聞かされた。しかし事情を知らず、相変わらず私に「(女) 友達紹介してよ」と言うサーファーもあり、周囲のサーファーはその言葉は「やばい」、そんなことを言うのは私を怒らせるに決まっているので「ばか」だと思っていたという。彼らにとって「女紹介してよ」というセリフは、女性に対する挨拶程度の言葉であると諭してくれたメンバーもいたが、私はそれを受け入れることが出来なかった。そのうち「紹介しろ」と言われても何も感じなくなった。むしろ「そうだね、今度飲み会でもしようか」と言うようになった。そのように変化した私に対し、S藤は「コンパしよって言っただけで昔は怒ってたんだぜ」とかつての私を引き合いに出し、「来たときは田舎っぺみたいだった。今は垢抜けた」と言った。つまり冗談を冗談だと受け取れず、本気になって怒っているうちは、誰も私をXサーフの仲間として認めることはできなかったのだろう。彼らは「女紹介して」とか「コンパしよう」という言葉で、「男性文化」を受け入れることができるかどうかを試していたのである。S藤は忠誠心チェックに「合格」してXサーフの一員としてふさわしくなった私を「垢抜けた」という言葉で表現したのだと思う。

4-2 下位文化の再生産

Xサーフのサーファーたちが、コンパやナンパに精を出し、女性と積極的に知り合ったり、酒に酔ったりする行為は、サーフィンの周辺で発達した下位文化に不可欠な部分を形成している。サーファーたちにとっては、サーフィンそれ自体に加えて、このある種の「逸脱的」行為が楽しみや満足を提供する場となっているのである。

そもそもサーフィンの周辺に育つ下位文化は、今迄述べてきたような「男らしさ」と関わる側面だけでなく、包括社会の上位文化と相容れない対抗的な要素を多分に含んでいる。ジョン・フィスクはサーフィン文化に含まれる対抗文化的要素を詳細に分析しているが、サーフィンは他のスポーツと違って、物理的にも概念的にも自然と文化の境界に位置するので、サーフィンは潜在的に反逆性を帯びるのだと言っている。確かにサーフィンの舞台であるビーチは自然と文化の境界であるし、海の上を自在に動き回るサーフボードは、

「現代の巨大船のようにテクノロジーを動員して人間の意志と要求を自然に対して押し付けるタイプ」(フィスク、1998:98)のものとは異なり、自然と文化の両義的カテゴリーに位置している。そしてサーファーたちの日に焼けた裸の身体、寝床でも移動手段でもあるバン(サーファーが好んで乗る車)も、多くのサーファーが大人と子供の間にある若者であるという点も、それぞれのカテゴリーの両方の性質を含む両義性を兼ね備えているのである。

このように対抗文化の要素を多分に含んだサーファーの下位文化は、包括社会から逸脱した価値を支えるシステムも良く発達させている。下位文化の中で許される或いは奨励される行為は、一般的な社会の規範に抵触する場合もあるので、それを支え、また維持していくための場や時間、仲間集団が必要となる。Xサーフのようなサーフショップ、サーフチームがその中心的な役割を果たす場合が多い。サーファーの多くは、初めてサーフィンをするにあたって、サーフショップを訪れるが、それはサーファーにとって単なるサーフィン用具販売の小売店ではなく、サーフィンを始めた人の生活をサーファーとしての生活として再組織化するメディアなのである。一人前のサーファーになるためには、逸脱を支える仲間や指導者が必要かつ重要となる。社会から逸脱した仲間関係の中では、集団内の規範への同調の圧力は大きい。仲間関係を維持するためのつきあいの中に、「男らしさ」を確認・強調する儀礼が含まれていると、ほとんどのサーファーたちはそれに忠実に従うことになる。

4-3 最近の変化

男らしさと深く結びついたサーファーの世界だが、最近ゆるやかではあるが確実な変化が起きてきた。従来よりも「男らしさ、女らしさ」の規準が曖昧になり、その隔たりや境界を楽に飛び越えていく人が現れ始めた。そして今では、サーフィンが日本にやってきて約40年の時が経ち、最初にサーフィンを始めた人たちの子供たちがサーフィンをする時代になった。サーフィン文化が根付き始めた現在、「男らしさ、女らしさ」よりも重視される秩序規範が生まれ始めたのだ。

まず目にとまるのは、男性サーファーたちにとって「女」として扱われる可能性が低かった女性、女性サーファーの増加である。サーフィンが日本で始まったといわれる1960年代、女性サーファーの数は非常に少なかった。しかも女性はサーファーの男性を岸から眺めて待っているのが典型的な姿だった。だがその後、1995年前後のボディボードのブームを機に、波乗りを楽しむ女性が急激に増加し、私自身そうであり、また私の周囲の女性に

もあてはまるのだが、この頃にボディボードを始めて、数年経った後にショートボードに乗り換え、そのまま波乗りを続ける女性が増え始めた。かつては結婚への圧力が大きく、適齢期を超えて結婚もせずにサーフィンをすることなど、あまり考えられなかったと聞かすが、現在の女性サーファーの平均年齢は高く、未婚者が多い⁽¹¹⁾。

年齢が高いのは結婚への圧力が弱まっていることに加えて、女性は男性よりも相対的に自立する条件に恵まれていないことも一つの大きな要因となっている。サーフィンをするには、車の免許を取得し、自分の車を手に入れ、各地のサーフィン・ポイントまで運転していき、そこで1人でも行動でき、経済的にも自由でなければ、サーファーとしての自由はなかなか獲得できない。女性にとっては、社会的・経済的・精神的自立か、あるいは恋愛・結婚・出産のコースか、どちらを選択するのか決めなければ、サーフィンに没頭することは難しい。もちろん両方を手に入れる女性もいるが、恋愛・結婚・出産の方に重点が置かれている（置かざるを得ない、あるいは置きたい人が多い）のが現状だと思う。また、業界としても女性という大きなマーケットを無視することができないという事情があり、女性向のサーフ・ファッションやサーフィン雑誌、サーフボードやサーフィン用具メーカーが急激な勢いで成長している。

女性たちのライフスタイルの変化にともなって、サーファーの世界にも大きな変化が訪れているのは確かだが、男性たちにもこれまでとは違った意識や行動をするタイプが現れるようになった。それは従来の男性性に縛られず、ボディボードをする男性や、夫婦や家族一緒にサーフィンを楽しむ男性たちである。ボディボードはこれまで「男らしくないもの」の象徴のように語られていた。しかし、そのような固定観念にとらわれることなく、あえてボディボードを極めようとする男性が次第に増え、今ではプロのボディボード組織も設立されている⁽¹²⁾。

また、若い男性たちが中心となってつくり上げられるチームからはなれて、休日の過ごし方としてサーフィンをする人がいる。この人たちにとって「男らしさ」は若者たちに比べておそらくそれほど重要ではない。サーフィンをしながら妻や子供、ペットの犬などと海辺で過ごすことは、休日の過ごし方の一つで、彼らにとってのサーフィンは気に入った

⁽¹¹⁾ 正確な平均年齢や未婚率はわからないが、私の周囲の女性サーファー（ショートボード）はほとんどが25歳以上であり、30歳を超えている場合も珍しくない。また、未婚者がほとんどで、既婚の女性サーファーは高い確率で夫もサーファーである。

⁽¹²⁾ ボディボードの組織には、次のようなものがある。JOB（日本ボディボード協会）日本のプロボディボーダーの組織。GOB（Global Organization of Bodyboarders）ワールドツアーを運営しているボディボーダーの組織。AWB（Association of Women Bodyboarders）女性のための世界のボディボーダーの組織。ISA（International Surfing Association）アマチュア男女混合世界選手権。

ライフスタイルの一つなのだろうと思う。

そしてまた、サーフィンの世界では、男女を軸とした支配関係よりも、別の軸が重視される場面がある。例えば、年に数回しか波が立たないけれども、非常によい波が立つ場所、あるいは世界的に見てもクオリティの高い波が立つ場所などは、地元に住むローカルと呼ばれるサーファーたちがそこで波乗りをするのを心待ちにしており、波が立ったときに良い波に乗る権利を持つのは、男性か女性かということだけによって決まるのではなく、ローカルかビジターか、技術が優れているかそうでないか、技術に加えてローカルに受け入れられる人物であるかどうかなど、様々な要素が絡まりあって決まってくるのである。

つまり、サーファーの世界の変化のきざしについてまとめると、次のようになる。

- 1) 女性サーファーの急増
- 2) 男性ボディボーダーの増加
- 3) 非チーム化（個人化）の傾向
- 4) ローカル重視の傾向

今回はこれらの点について詳しく論じることが出来なかったが、このようなサーファーの世界の構造的変化や状況依存性は、「男らしさ」との結びつきを流動化させる可能性を持っていると言っているのではないだろうか。近代という時代の変化と共に、その性質を変化させてきたサーフィンと下位文化の関係は、再び変化の時を迎えつつある。

総括と展望

本論では、スポーツにおけるジェンダー不平等な関係と規範が創出される具体的な過程を明らかにするにあたり、サーフィンの周辺で発達した下位文化と「男らしさ」の結びつきを手がかりとして、ホモソーシャルリティ、ホモフォビア、他者からの承認、「男のメンツ」を守るプレッシャーという4つの「男らしさ」の表出形態という枠組みをもとに、分析を試みてきた。その際、できるだけ抽象的な議論を避け、Xサーフのメンバーたちが日常的に使用している言葉、そこで生じた具体的な出来事を素材にしてきた。

スポーツの周辺で育つ下位文化が「男性原理」と密接に結びつき、「男らしさ」の表出が頻繁に見られる事例は、かならずしもサーファー集団にかぎられるわけではない。むしろ、現代社会においては、多くのスポーツが男性の身体文化に由来するので、男性性の鍛錬や証明や強調の場となっていることは言うまでもない。本論ではサーファーの世界の下

位文化と「男らしさ」のかかわりの検討に焦点をあてたため、この世界の独自性というものはほとんど明らかにすることが出来なかった。また、サーフィンの下位文化に見られるような「男らしさ」は、他の若者の下位文化と比較して、何ら変わることはない。

ただし、サーフィンの世界をやや特異にしているのは、そこに含まれる対抗文化的な要素である。今回はあえて対抗的要素には触れず、下位文化との結びつきに限定して論じたので、この点に関しての詳しい検討は次回に譲ることになるが、対抗文化的要素に女性の進出が加わると、その文化に大きな変化をもたらすように見えるのだ。サーファーの世界は上位文化への抵抗を示しつつも、男性優位な原理への抵抗はあまりみられず、男性が優位な立場で女性が従属的な立場におかれているのだが、それでも女性達にもその抵抗精神は何らかの形で受け継がれている。少なくとも私の周囲の女性サーファーたちは、サーフィンを自由で楽しい自立した生き方のひとつと捉えており、彼女たちにとってサーフィンはやはり対抗文化なのである。それが、従来のような結婚・出産というライフコースのオルタナティブとしての「常識的な生き方への抵抗」なのか、あるいは結婚・出産それとも仕事・趣味という二つの（二つしかない）ライフコースの二者択一自体を無効にするものなのか、現時点では女性とサーフィンのかかわりの歴史が浅いのでよくわからない。しかし、いずれにしても、ライフスタイルとしてのサーフィンという側面は、サーフィンを他のスポーツと一線を画す明確な独自性であると思う。

また、男性たちのサーフィンへの関わり方にそれまであまりなかった多様性がみられるようになったことや、日本にサーフィンが根付いて新たにローカルとビジターという支配関係が生じ始めたことによって、ジェンダーの視点だけでサーフィンの世界を描くことは、特にサーファーの経験に注目する場合には、大きな限界があるといわざるを得ない。このことをふまえた上で、今後は、対抗文化／ライフスタイルという視点、ローカル／グローバルの視点、そして男性の多様性や女性の経験に焦点をあてた議論へとすすんでいきたいと思う。

引用・文献

- 『BEACH COMBING Surf Patrol Magazine 1995-1998』 ライズシステム
 Connell, R. W. 1995. *Masculinities*, Polity Press.
 Curry, T. J. 1991. "Fraternal bonding in the locker room : A profeminist analysis of talk about competition and women", *Sociology of Sport Journal*, 8: 119-135.
 Dempsey, K. 1990. "Women's life and leisure in an Australian rural community", *Leisure Studies*, 9: 35-44.
 Fine, Gary Alan. 1996. *Kitchens: The Culture of Restaurant Work*, University of California Press.
 フィスク・ジョン 1998 山本雄二訳 『抵抗の快楽——ポピュラーカルチャーの記号論』 世界思想社

- Irwin, John. 1973. "Surfing: The Natural History of an Urban Scene", *Urban Life and Culture* Vol.2 No.2, Sage.
- 伊藤公雄 1998 「<男らしさ>と近代スポーツ —— ジェンダー論の視点から」 『変容する現代社会とスポーツ』 日本スポーツ社会学会編 世界思想社
- 1999 「スポーツとジェンダー」 井上俊、亀井佳明編 『スポーツ文化を学ぶ人のために』 世界思想社
- Messner, M. A. R. Sobo. D. F. 1994. *Sex, violence, and power in sports : Rethinking masculinity*, Crossing Press.
- Messerschmidt, J. M. 1993. *Masculinities and Crime*, Roman & Littlefield.
- 西山哲郎 1998 「遊ぶ —— ジェンダーがつくる『らしさ』」 伊藤公雄、牟田和恵編 『ジェンダーで学ぶ社会学』 世界思想社
- Pearson, Kent. 1979. *Surfing Subcultures of Australia and New Zealand*, University of Queensland Press.
- Polsky, Ned. 1967(1988) *Hustlers, Beats, and Others*, Expanded Edition of the Classic Study of Deviance, Updated with a new Chapter and Foreword, The Lyon press.
- セジウィック・イブ 2001 『男同士の絆 —— イギリス文学とホモソーシャルな欲望』 名古屋大学出版会
- シアード・K.G./E.G.・ダニング 1988 海老島均訳 「男性領分の一タイプとしてのラグビークラブ —— 若干の社会的論評」 J.W.ロイ他編著、桑野豊編訳 『スポーツと文化・社会』 ベースボール・マガジン社
- 清水諭 1993 「サーフィンする身体 —— 脱近代の身体と自然」 日本体育学会編集『体育の科学』vol.43 杏林書院
- 宇部一 1995 「ゲレンデの仲間たち —— 社会人スポーツクラブの人間関係」 山内隆久編 『人間関係事例ノート 心のネットワークを求めて』 ナカニシヤ出版

(みずの えり・博士後期課程)

A Study on the Relationship between Sport and Subculture : 'Male Culture' Portrayed at X Surf Shop

Eli MIZUNO

Studies on men and masculinity as a new topic of gender studies has gained popularity in the United States, the United Kingdom, and also in Japan since the 1980's. There are increasingly more sociologists trying to analyze sport and masculinity, with particular focus on men's experience of sport. The examination of how women are suppressed and subordinated in sport is closely related to the analysis of men and masculinity. The work which analyzes women most deeply is the one which includes analysis of the privileges and power held by men. Although some studies on the relationships of sport and masculinity are appearing in the field of men's study in Japan, and discussions of the history of sport as a reflection of modern industrial society which is lead by men are being undertaken, an examination of the experience of sport and of the world of sport has never been done.

In this article, I consider the relationship between sport and masculinity focusing on the experience of surfing to show the process of the production of unequal gender relations and norms. I want to make clear the dominance relationships constructed by daily practices of people who do surfing, paying attention to the expression of 'male principles' and masculinity included in the subculture surrounding surfing.

First, we look at the outlines of studies on modern sport and gender, and extract the frameworks of expressions concerning masculinity which are included in sport subculture: 1) homosociality (exclusion of women), 2) homophobia (prohibition of homosexuality and 'being not masculine'), 3) approval by others (owning women and securing admirators), 4) pressure of saving 'men's face' (actions beyond one's ability, disguising weakness, and presentation of power). Secondly, we examine the masculinity expressed in the world of surfers based on the above frameworks, looking at the condition of reproduction of subculture. Then we refer to the recent changes within the world of surfers: 1) sharp increase of female surfers, 2) emergence of male body boarders, 3) tendency of non-affiliation of teams (personalization), and 4) tendency of emphasis of localism. These characterize the possibility and the germination of change in their world because the changes mean the beginning of new order and norms, replacing the old but formerly strong 'feminine and masculine' order norms.